抑うつ的反すうと社会的問題解決

Social Problem-Solving Inventory-Revised, Short form と Means-Ends Problem-Solving Test を用いた検討

○長谷川晃¹・吉田琢哉¹・服部陽介²・西村春輝³・森本浩志⁴・丹野義彦⁵(¹ 東海学院大学人間関係学部・² 京都学園大学人間文化学部・³ 筑波大学大学院人間総合科学研究科・⁴ 広島国際大学心理科学部・⁵ 東京大学大学院総合文化研究科)

キーワード: 抑うつ反すう, 社会的問題解決, 抑うつ

Depressive rumination and social problem solving: A study using two measures of social problem solving

Akira HASEGAWA¹, Takuya YOSHIDA¹, Yosuke HATTORI², Haruki NISHIMURA³, Hiroshi MORIMOTO⁴, and Yoshihiko TANNO⁵(¹ Faculty of Human Relations, Tokai Gakuin University, ² Faculty of Human and Cultural Studies, Kyoto Gakuen University, ³ Graduate School of Comprehensive Human Science, University of Tsukuba, ⁴ Faculty of Psychological Science, Hiroshima International University,⁵ Graduate School of Arts and Sciences, University of Tokyo)

Key Words: depressive rumination, social problem solving, depression

目 的

抑うつ反すう(以下, 反すうと略記)とは, 自己の抑うつ症状やその状態に陥った原因・結果について消極的に考え続けることを指す(Nolen-Hoeksema, 2004)。多くの調査研究や実験研究で反すうが抑うつやうつ病性障害の脆弱性要因であることが示されている(Nolen-Hoeksema et al., 2008)。また, 反すうの頻度を測定する Ruminative Responses Scale(RRS)より, 抑うつとの関連が強い考え込み(brooding)と, 関連が弱い反省(reflection)が抽出されている(Treynor et al., 2003)。

本研究では, 反すうやその一要素である考え込みが抑うつを導く過程や, 反省が抑うつとの結びつきが弱い理由について, 社会的問題解決の各次元との関連という観点から検討する。社会的問題解決を測定する代表的な指標として Social Problem-Solving Inventory-Revised, Short form(SPSI-R:S; D'Zurilla et al., 2002)と Means-Ends Problem-Solving Test (MEPS; Platt & Spivack, 1975)が挙げられる。SPSI-R:S はポジティブな問題志向(Positive Problem Orientation: PPO), ネガティブな問題志向(Negative Problem Orientation: NPO), 合理的問題解決(Rational Problem Solving: RPS), 衝動的・不注意型スタイル(Impulsivity/Carelessness Style: ICS), 回避型スタイル(Avoidance Style: AS)から構成される質問紙である。MEPS は, 回答者に 4 つの仮想の問題状況の開始時とその状況が解決された状態を提示し, 回答者がその問題を解決するために用いる方法を報告させる課題である。得られた回答は, 問題解決に有効であると考えられた方略の数(以下, 有効な方略)と, 案出された方略全体の有効性という 2 つの観点で評定される。

反すうと社会的問題解決に関する理論や先行研究を踏まえると, 考え込みと RRS 合計得点は NPO や AS と正の関連が認められ, PPO, RPS, MEPS の各得点と負の関連が認められると考えられる。また, 反省は NPO や AS と正の弱い関連ないし負の関連が認められ, PPO, RPS, MEPS の各得点と負の弱い関連ないし正の関連が認められると予想される。

方 法

3 大学の学生に調査を行い, 有効回答者数は 227 名(男性 99 名, 女性 128 名, 平均年齢 19.54 歳, $SD = 3.10$)であった。参加者は, ①抑うつ症状を測定する Beck Depression Inventory-Second Edition(BDI-II; 小嶋・古川, 2003), ②RRS(Hasegawa, 2013), ③SPSI-R:S(Hasegawa et al., 2014), ④MEPS に回答した。MEPS は質問紙の形式で実施した。第 1 発表者が上記の 2 つの観点から得られた回答を評定した。また, 第 2 発表者が各状況の 50 名分の回答を評定した。評定者間で回答の相関係数を算出した結果, 有効な方略では 4 場面の平均で .76 であり, 有効性では .71 であった。調査終了後,

参加者に謝礼として 500 円分の図書カードを進呈した。本研究は東海学院大学人を対象とする研究倫理委員会の承認を得て, とり行われた。

結 果

BDI-II は考え込みや RRS 合計得点と中等度の正の相関が見られ($r = .44, .49, p < .001$), 反省と弱い正の相関が見られた($r = .16, p < .05$)。また, BDI-II は NPO, ICS, AS と正の相関が見られ($r = .46, p < .001, r = .21, .21, p < .01$), PPO と負の相関が見られた($r = -.29, p < .001$)。BDI-II は RPS や MEPS の両得点と無相関であった($-.12 < r < .01$)。最後に, BDI-II の影響を統制した上で, RRS の各得点と社会的問題解決の各指標の偏相関係数を算出した。その結果を Table 1 に示した。

考 察

仮説と一致して, RRS 合計得点や考え込みは NPO や AS と正の偏相関が見られた。以上より, 反すうやその一側面である考え込みが抑うつを強める過程には, ネガティブな問題志向や回避型スタイルの増加が関与していると考えられる。一方, RRS 合計得点や考え込みは RPS や MEPS の各得点と正の偏相関が見られた。臨床群を対象とした研究や反すうを誘導した実験研究では, 反すうと MEPS の各得点に負の関連が認められており (Donaldson & Lam, 2004; Lyubomirsky & Nolen-Hoeksema, 1995), 本研究では異なる結果が得られた。本研究では RPS や MEPS の各得点と抑うつが無相関であったため, 反すうは合理的な問題解決スタイルを促進することを介して抑うつを弱めているとは考えられない。反省は PPO と正の偏相関が見られ, RPS との関連は考え込みよりも強かったため, 反省は積極的な問題解決を導くことが示唆される。

Table 1 BDI-II の影響を統制した上での RRS の各得点と社会的問題解決の各得点との関連

	考え込み	反省	RRS 合計
PPO	-.07	.20 **	.07
NPO	.47 ***	.08	.41 ***
RPS	.25 ***	.45 ***	.39 ***
ICS	-.00	.01	.04
AS	.18 **	.03	.21 **
有効な方略	.21 **	.13 *	.18 **
有効性	.20 **	.12	.15 *

* $p < .05$, ** $p < .01$, *** $p < .001$